
真那浦南の不発弾(ダット・ボーイ)

史郎院彼方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真那浦南の不発弾ダット・ボイ

【Zコード】

N1977Z

【作者名】

史郎院彼方

【あらすじ】

百九十一センチという身長と、生まれつきである栗色の髪、前髪で顔の右半分を隠すなど、身体的特徴が多い十五歳の少年、雪村春。

父が職場で栄転を果たしたことで、生まれ育った奈良を出て、
神奈川県真那浦市に引っ越し、真那浦市南部にある真那浦南高校に
入学した。

中学時代を思い出しながら、春は切に願っていた。

平穏な学校生活になることを……

だが、ある出来事がきっかけとなり、春が新天地での高校生活にかけた望みは、入学から僅か一ヶ月と数日で、グラグラと揺らぎ始めていく……

「一緒に帰らない?」（前書き）

初めまして、史郎院彼方と申します。
今回、初めての小説執筆＆投稿となります。
駄目な部分ばかりでお見苦しいものになるとは思いますが、よろしくお願いします。

「一緒に帰らない?」

5月も半ばとなつたある日……神奈川県真那浦市^{まなうら}の真那浦南高校……

朝の教室で、雪村春は誰とも話さず、窓際に一人佇み、ボンヤリとした表情で窓から見える景色を眺めていた。周囲の生徒たちは、そんな春に近づき難いのか、談笑しながら遠目にチラチラと見ることはあるが、話しかけようとすると者はいなかつた。ただ一人を除いては……

「おはよう、雪村くん」

「おはようさん……」

背中越しに聞こえた挨拶に対し、春は振り向きもせずに小さな声で挨拶を返す。そんな春を見て、挨拶をした女生徒……北見愛奈は優し気な笑みを浮かべた。

「……とりあえず、連絡事項はこんなところだ……じゃ、解散」

春のクラスを担当している、黒いスーツを着崩した女教師、浜崎のやる気の無い一声を受けて、生徒たちは自由に動き始める。席に着いたまま勉強道具を広げる者、帰り支度を整える者、部活動に向かう者と様々だ。

部活動に参加しておらず、勉強熱心でもない春は、今日出された課題をするのに必要な物だけを鞄に入れて帰ろうとしていた。

「あの、雪村くん?」

春が教室の入り口まで歩いたところで、背後から声をかけられる。

「……なんや?」

「一緒に帰らない?私たちと……」

振り向いたところにいたのは、太陽のよつな笑顔の愛奈と、背

が低く目付きの鋭い女生徒だった。

（まさか……俺が誘われるやなんて……）

内心、非常に嬉しかった春は、いつもは無愛想な印象を『』える暗い表情が、少しだけ明るくなる。

「え……えつと……」

返事をしようとするが、思わず吃つてしまい、視線は宙を泳いでしまう。

（な、なに吃つとるんや俺……”ええよ”って言えばええだけやんあ、でも……）

一度は帰宅の誘いに応じようとするが、その瞬間、ある景色が春の頭に浮かぶ。その景色は、自宅への帰り道とは反対方向にある大きな鉄橋と、鉄橋の真下の河川敷だった。

「……今日は……ちょっと、用事があるんや……」

少しだけ考えてから、春は小さな声で『』う言つと、愛奈たちに背を向けて教室を出て行く。

「あ、ちょっと……」

すかさず愛奈が声をかけるものの、春は足を止めずに廊下を進んで行つた。

「なんなのアソッ? 愛奈の誘いを断るなんて……愛奈?」

背の低い女生徒が不満気に呟いて、隣に立つ愛奈を見上げる。

「……」

愛奈は春が出て行つた教室の入り口に視線を向けたまま、ボンヤリとしていた。

「ちょ、ちょっと……なにボーッとしてるのよ?」

声をかけながら女生徒は愛奈のスカートの裾を引っ張るが、愛奈には聞こえていないのか反応が無い。そんなやり取りを、教室に残つた生徒たちに見つめられたまま、時間がだけが経過していくのだった。

「なあ、あれ……雪村だよな？」

「うん、雪村くん……だよね？すげえ高いし、髪型も……ちょっと”あれ”だし……」

校門近くにいる生徒たちは、ヒソヒソと、内緒話をするよつて口元を隠して話していた。そんな彼らの視線の先にいたのは……

「北見……また誘ってくれへんかな……」

高校生活は、楽しくなくても平穀であればいい……そう考えていた春だったが……

「一緒に帰らない？」

愛奈の言葉が脳裏をよぎる。中学時代の自分に決してかけられず、高校でも自分には無縁と思っていた言葉が、春には単純に嬉しかった。

朝、教室で会つたびに”おはよう”と囁いてくれる。多くの人にとってはあまりに些細なことかもしれないことも、内心では大喜びしてしまう春にとつて、一緒に帰らないかと誘われたときの嬉しさを、心の中にしまつておくことは出来ず、表情は緩み、思わず鼻歌まで歌つてしまうのだった。

普段の春の印象からはあまりにかけ離れたその様子に、周囲の視線を集めてしまっていたが、少しも気にすることもなく、春は学校をあとにするのであった。

「やつぱ……かわええなあ……」

「……あ、あれ？」

放課後の教室……春が教室を出てから、しばらぐボンヤリとしていた愛奈は、ハッと我に帰り、辺りをキョロキョロと見回す。

「……大丈夫？ いつたいどうしちやつたの？」

心配そうな表情を浮かべながら、隣に立つ背の低い女生徒は愛奈のスカートの裾を掴んで愛奈の顔を見上げる。

「あ、加奈江ちゃん……私……」

「まつたく……その立派なお胸様をこいつ……モリモリ……つてしても、まるで反応が無いんだもん。ちょっと心配しちやつたわよ」

キヨトンとしている愛奈のスカートから手を離した、加奈江と呼ばれた女生徒は、両手を少し前に出して、胸を揉む仕草を見せる。

「？……も、もお……！ それやめてって言つてるのに……」

加奈江の手の動きを見て、愛奈は頬を赤らめながら、腕で胸元を隠す。

「テへへ……相変わらず、可愛いリアクションしてくれますなあ……」

愛奈の反応を見て、加奈江は新しい玩具を手にした幼子のよつな笑みを浮かべつつ、その表情に似つかわしくない下卑た笑いを漏らした。

「……バカア……もう知らないつ」

頬を赤くしたまま、加奈江を置いて一人早足で、教室を出て行く。

「アハハ、ちょっと待つてよお……」

そんな愛奈を追つて、加奈江もまた早足で、教室を出て行くのだった。

「……あいつら、なんも変わりないとええんやけど……」

春が買い物客で賑わう商店街を抜けて少し歩くと、あまり年季の入っていない鉄橋の前に辿り着く。

かつてこの地を治めていた戦国武将の名前から、あさあはし 麻芽橋と名付けられた鉄橋。利保川を境として北部と南部に区切られた真奈浦市……この鉄橋は、その二つを繋ぐいくつかある橋の一つである。

春は落ち着きの無い様子で周囲を見渡す。これから自分の行動を、街の者ならともかく、真奈浦南高校……通称”南高”に通う者には見られたくないからだ。特に、自分に声をかけてくれる唯一のクラスメイトには……

（前後左右、よう確認して……と……）

真奈浦南高校の生徒であることを示す紺色のブレザーが見えないことを確認すると、そそくさと河川敷へ下りて行った。

「……よう、元気やつたか？」

河川敷へ下り、麻芽橋の真下に位置する場所に来ると、春はそこにいた、一匹の猫に声をかける。一匹は三毛猫、もう一匹は黒猫で、一匹とも雌の成猫であった。そんな一匹の猫に向けて発された声は小さいものの、普段とは違い、とても気さくな印象を感じさせる。

春に気付いた一匹の猫は、特に警戒した様子もなく、春の足元に近づいてくる。

「やつぱ……かわええなあ……」

春はその場にしゃがみ込むと、近づいてきた一匹の猫の頭や背中を撫でる。撫でられた猫は、黒猫は目を細めながら「口」口と喉を鳴らして喜びを表現し、三毛猫は特に気にもしない様子だが、たまに撫でる手を離すと、それに抗議するように身を寄せてくる。

「また、家に帰るのが遅なつてしまうな……」

猫たちを撫でながら、春は小さく笑みを漏らした。

「退屈だあ……」

商店街の中にひつそりと存在する小さな古本屋の中…… 桜庭冬樹はさくらばるひなきふゆきは立ち読みに興じながら、溜め息を吐いた。

この古本屋には若い者が滅多に来ない為、ほとんどの客は、初老をとうに過ぎた昔からの常連客である。そんな彼らの一部に、珍しいモノを見るような目で見られていた冬樹だったが、それは、若い客がいる珍しさだけでは無い。黒いニット帽を被り、赤色のパークーの上から南高のブレザーを着たその体は、どこの力士かと思われるほど大きく、力強さを感じさせる体躯をしていたのだ。

「あー……駄目だ。今日はもう帰るか……」

小さく独り言を呟きながら、冬樹は読んでいた本……数学の参考書を本棚にしまい、出口に向かう。

（つたく……口クの野郎、三年になつた途端に、つれなくなりやがつて……）

「…………クソッ…………ホント、つまんねえ…………」

古本屋の出口まで来た冬樹は、一言だけそつ漏らすと店を出て行くのであった。

「…………」「？」

利保川の河川敷で猫たちと戯れていた春だったが、ふとあることに気がついて、猫たちを撫でる手を止めた。

「そりいえば……名前、つけてへんなあ……」

猫たちから手を離して、春は考え始める。

（三毛猫がミケで、黒猫がクロ……いやいや、それやどりゅうと……）

地面をじっと見つめたまま、春は深く考え込んでいく。猫たちは、撫でるのをやめたのが不満なのか、黒猫は後ろ足で立つて春の右足の脛に前足でしがみつき、三毛猫は、左足の脛にピタッピタついた。

だが、それにもまつたく気づかずに、春の考え事は続く。

（一）（二）は神奈川やし……神奈川いうたら、鎌倉……鎌倉幕府……頼朝と義経……北条政子と静御前……）

「マサ」「と……シズカ。うん、ええかも……ん？」

地面を向いていた顔を少しだけ上げて、春は猫たちが自分にくついていることに気付く。

「あ、ああ……すまんな、放つたらかしにしてしまひ……」

春はそう言つて、猫たちと再び戯れようと手を伸ばした、そのとき……

「おーい、ちょっとといいかあ？」

背後から、突然声が聞こえる。それが自分に向けられたのものかと思い、春はしゃがみ込んだまま、背後に目を向ける。猫たちは少年たちを見ると、すかさず背を向けて走り出して行つた。

「あ……はあ……」

猫たちが離れて行つたのがわかり、思わず溜め息を吐いてしまつた。目を向けた先に立っていたのは、黒い学生服を着た三人の少年。その先頭に立つ、裾が腰より少し上の辺りまでしか無い学生服

を着た、茶髪の軽そうな少年は、見下すかのように春に視線を向け、その後ろにいる一人……顔が瓜一つで、髪の色以外は一致しているところを見ると、双子であると思われる金髪と銀髪の少年は、不安気な表情で立っている。三人とも、学生服の襟には、一年生であることを示す、英数字の”1”を象った襟章を付けていた。

「えつと……俺？」

自分に声をかけたに違いないと思いつながらも、そうでないことを心中で祈りながら、春は自分を指差してそう言つてみた。

「……そうそう、俺あ真奈浦中央の陣内つて者なんだけどさあ、ちよつと頼みた」ことがあるんだよなあ……」

真奈浦中央高校……真奈浦市南部から麻芽橋を渡つてすぐのところにある朝永地区に存在する男子校である。

「……むう……」

春は、関わりたくないといつ気持ちから溜め息を吐きそうになるが、これまでの経験から、それが聞かれたら面倒なことになると瞬時に判断し、溜め息を堪えながら立ち上がる。

「うわあ……」

「やつぱり……背え高つ……」

陣内の後ろにいる双子は、立ち上がった春を見て、口を半開きにしている。その表情は、更に不安の色を濃くしていく。

(うつとうでかいヤツに限つて、見かけ倒しだつたりするんだよなあ……)

心中で意地悪くそんなことを言いながら、陣内は話を続ける。

「頼みたいことってのはあ……」このことなんだけどさあ……

自分より大分背の高い春の顔を見上げながら、それに驚く」ともなく笑みを浮かべた陣内は、地面を指で差し示す。

「……」

「そ、」

春もまた、地面を指差し、首を傾げながら陣内の顔を見る。

「ぶつちやけた話……ここ、なんか快適そうだからさあ、俺らの溜まり場にしてえんだけど……良いよなあ？」

そう言つて、春の顔を見上げる陣内の目が、獲物を見つけた猛禽類のように鋭くなる。その目は、拒否は許さないといつ明確な意思を示していた。

（勝手にしたらええ……って言つたら、もうここには近寄れん……ここで、あいつらと遊べんようになつてしまつ……でも、こういうヤツらとはもう関わりとうないし……）

高校入学から一ヶ月半……あまり楽しくはないが平穀だった春の高校生活に、急激な変化が訪れようとしていた。

「セニゼニ、愉しそうでくれよな……」

無言のまま、陣内の”頼みごと”に応じるべきか悩み続ける春……そんな彼の様子に業を煮やしたのか、陣内は突然、両手で春の胸ぐらを掴み……

ドンツ!

ツ
！
！」

春の体を壁に押し付けた。一度考え込むと周りが見えなくなることが多い春は、突然のことに思考が追いつかず、なすがままであつた。

「い、い、よ、なあ？」

薄つすらと笑みを浮かべ、一言一句を強調して語り陣内は、胸ぐらを掻んだ手の握力を強め、顔を春に近づける。

「
駄目や

考えをまとめた春は、陣内を睨みつけて言い放つ。

「おも」

春の言葉を聞いた陣内は小さく溜め息を吐き、胸ぐらを掴んだ。手を離しかと思つと、すかさず春の頬田掛けて拳を叩き込んだ。

「もう一回聞くけど……良いよなあ？ 駄目つてこたあ無いよなあ……」
なあ？」

再び胸ぐらを掴み、陣内は顔をグイッと近づける。その顔からは、笑みが消え、目付きは鋭さを増していく。

「……なんべん聞かれても……駄目なもんは駄目や……」

「……しょうがねえなあ……おーい二人とも……こいつ抑えろ……」「

「お、おう……」

「わ、わかった……」

陣内の言葉を聞いて、その後ろでハラハラとした様子で見ていた双子は、それぞれが春の両隣に移動して、腕を掴んで春を膝立ちにさせる。春は抵抗しようとせず、膝立ちの姿勢で俯いていた。

「おら、顔上げる……ん?」

俯いた顔を上げさせようと、春の長い前髪を掴んで引っ張った陣内は、あることに気付く。

「なるほど……変な髪型だとは思つたけど、そういうことかあ……」

「……くつ……」

春の前髪を掴んだまま、陣内はニヤリと笑つた。陣内の視界に写る春の顔の、長い前髪で隠されていたところには、大きな傷痕があつた。その切創は、眉の上辺りから、頬まで真っ直ぐに走り、瞼は開かなくなっていた。

「見られんのが恥ずかしくて隠してたつてのかあ?乙女かよお前はあ……クッククッ……」

「……どうでもええやろ……」

心底馬鹿にしたように笑う陣内に対し、春は、睨みつけながら静かに咳く。

「確かに……どうでもいいやあ……」

そう言つて陣内は、前髪を掴んだ手を放すと同時に、春の腹に

蹴りを放つ。

「うつ……くう……」

腹部への衝撃に、思わず苦悶の表情を浮かべる春……そんな春の様子を、陣内は心底楽しそうに見つめる。

「さて、と……せいぜい、愉しませてくれよな……」

これから、田の前にいるヤツを好きだけ痛めつけることが出来る……そう考えただけで、陣内の加虐心には火が点き、その火は瞬く間に、大きく禍々しい炎となっていく。

だが春は、これから自分が受ける暴力に対する恐怖は無い。恐

れているのは、また別の事……

（……絶対に耐えたる……そつせんと俺の居場所は……せやから、耐えられんようになつてブチ切れるんだだけは、絶対あかんのや……）

感情の暴走……かつての自分は、それが原因で多くの人たちを傷付け、春自身も多くの傷を負い、しまいには右目の光を失つた。

（……負けへん……暴力にも、俺自身の感情にも……）

顔を地面に向けた春は、そつ心に強く言い聞かせながら、顔を上げた。

「あ……加奈江くん？」

「そこのお嬢さんたち……良かつたら一緒に、ケーキバイキングにでも行きませんか？」

「……へ？」

「な、なに？」

冬樹はすぐ近くを歩いていた一人の少女……愛奈と加奈江の前に、軽快な動きで飛び出してきた。そんな冬樹を、愛奈はキョトンとした顔で見つめ、加奈江は戸惑いながらも睨みつける。

「あれ？俺のこと知らない？南高の桜庭冬樹って言えば、この辺じやあ有名だと思つんだけど……」

そう言つて冬樹は、自慢気に大きく出た腹を叩いて見せる。

「……知つてる？加奈江ちゃん……」

「いや、全然知らないけど……」

愛奈と加奈江は、お互いに顔を見合させて首を傾げる。

「なるほど……それより、これから予定が無いなら、ひょひつと付き合わないか？」

冬樹は軽い調子で言いながら、一歩歩み寄る。

「あ、あの……えっと……」

「悪いけど、急いでるからこれでー！」

狼狽する愛奈の手を掴み、加奈江は冬樹の横を走つて通り過ぎて行つた。

「……慣れない」とするもんじやねえな……恥ずかしいつたらねえぜ……」

その場に立ち尽くし、冬樹は思わず苦笑してしまつ。
(タケたちとつむるものも楽しいんだが……やっぱ、物足りねえな……)

「はああ……」

ガックリと肩を落とし、冬樹は大きな溜め息を吐いた。

「よし、今度こそ帰るつ……帰つて勉強だ……」

そう自分に言い聞かせるように呟くと、冬樹は早足で歩き出した。

「はあ、はあ……」

「加奈江ちゃん……大丈夫？」

全力で走ったためか、息を切らしている加奈江を、同じ距離を走つたにも関わらず、特に疲れた様子も見せない愛奈は心配そうに見つめる。冬樹を置いて走り出した一人は、麻芽橋の前まで来ていた。

「あ、大丈夫……はあ……ちよつと疲れただけ……」

加奈江は息を整えながら、愛奈に微笑んで見せた。

「そ、そう？ それならいいんだけど……」

「とにかく……はあ……少し休ませて……」

未だに心配そうな様子の愛奈をよそに、加奈江はその場で腰を降ろした、その時……

「うわああ……！」

「……！」

「どこからか聞こえた悲鳴に、愛奈は思わず背を震わせた。

「今ひとつ……」

「あそこから聞こえたけど……」

愛奈と加奈江は顔を見合せると、橋の下に視線を向ける。

「おわああ……！」

「……また……」

「うん……つて、愛奈……？……もあ……」

悲鳴が再び聞こえたと思いきや、愛奈は河川敷へと降りて行く。

加奈江は驚きながらも立ち上がり、愛奈の後について行つた。

「……いつたいなにが……！？」

悲鳴の聞こえた場所まで来た愛奈の視界の先には、顔面を額より流れる血で朱に染めた春と、血が滴るモンキーレンチを片手に驚いた様子の陣内が向かいあつていた。緩やかな流れの利保川には、陣内の後ろに控えていた双子の少年が腹をおさえて苦し気な表情で倒れていた。

「ゆ……雪村……くん？」

眼前の光景に怯えながら、クラスメイトの名を呟く。

「…………え？」

その呟きが聞こえたのか、春は無言で、ゆっくりと声のしたほうに顔を向けた。暗く、それでいて澄んだ瞳が一人の少女の姿を捉えたとき、春の表情に驚愕の色が浮かんだ。

「あ……俺……」

なにか言おうとした春だったが、直後、世界が大きく揺らいだかと思うと、目の前に石が敷き詰められた地面が迫つてくる。そのまま前のめりに倒れしていく春だったが……

（あれ……なんか、柔らかい……）

地面に倒れた筈の体に伝わってきた感触は、思いのほか柔らかく暖かいものだった。

薄れゆく意識のなか、視界に映つたのは、いつの間にか自分の体を支えていた愛奈の、艶のある腰辺りまで伸びた黒髪だった。

そして、愛奈から伝わる暖かさに包まれたまま、春は意識は深い闇の中へと沈んでいった。

「来いや、クソガキ……」

三年前……

春の通う中学から決して近いとは言えないぐらいのところにある小さな廃工場……床には、鉄材や工具などが乱雑に置かれていた。

「……おいおい……これだけの人数揃えても敵わんのか……」

強面の男が両手を学ランのポケットに入れたまま、田の前の光景を見て亥く。その光景の中心にいるのは、ついこの間まで小学生だったとは思えない身の丈をした少年……雪村春。

その周りには、先程までその少年が無抵抗でいたのを良いことに、袋叩きにしていた不良たちが倒れていた。倒れたままピクリとも動かない者、鼻骨を折られて顔を血に染める者、目に涙を浮かべて腹をおさえる者など、その状態は様々である。

「ハア……ハア……」

肩で息をしながら、春は強面の男に体を向け、ゆっくりと近付く。

「……しゃあないな……」

男はそう亥くと、ポケットから手を抜いて殴り合いの態勢に入る。

「来いや、クソガキ……」

「フウ……アア！」

男の挑発に呼応するかのように、春はゆっくりとした歩みを一瞬止めたかと思うと、男目掛けて駆け出して間合いを詰める。そして、男はそれ待っていたのか、間合いを詰めてきた春の腹部目掛けて前蹴りを叩き込んだ。

「グツ……！」

「ツ！コイツツ！……」

春の腹部を正確に捉えた前蹴り……春はその痛みに表情を歪ま

せながらも、男が引こうとした蹴り足を両手で掴み、そのまま掴んだ足を勢いよく引っ張る。男はその勢いに逆らえず、軸足を滑らせて地面に仰向けに倒れ、春はすかさず男に馬乗りになる。

「ハアア……ハア……」

馬乗りになつた春は男の顔面目掛けて握りしめた右手を振り下ろす。

「ガツ……」の……クツ……」

右、左、右、と……春は畳み掛けるように男の顔面へ交互に拳を打ち込む。だが、男もやられっぱなしではなかつた。

「うつ……うあ……」

春の頭を掴むと、馬乗りされた態勢のまま頭突きをし、怯んだところですかさず今度は肩を掴んで力一杯押し込む。互いの体は横にぐるりと一回転し、今度は男が馬乗りになる。

「調子乗んのもここまでや……」

男は不敵な笑みを浮かべたかと思つと、春の前髪を掴み、春の後頭部を地面にガツンと押し付けた。

「ウア！……ウウ……」

「もういいちよ……！」

顔を顰めて痛がるのも構わず、男はこじぞじばかりに何度も春の頭を地面にガンガンと押し付ける。春は抵抗しようとするが、不良たちに散々痛めつけられたうえに、頭に強い衝撃を何度も受けた体は、徐々に動きが鈍つっていく。

「アガツ……グアア……」

「こいつで……終いや」

男は春の前髪から手を放した男は両腕を高く上げると、自分の両手の指を絡ませてグツと握り締め……

「くたばりいやつ……！」

「……！」

春の顔面へ狙いを定めてから、一気に振り下ろした。

「な、なんでもないわ……」

「…………」

日が沈みきった頃の病院の一室……頭に包帯を巻いた状態で、春はベッドに寝ていた。そんな春を、愛奈はベッドの傍に立ち、ボーッとして立ちつくしてそのまま無言で見つめている。

「ね、ねえ……そもそも帰らない? お医者さんだつて、そこまでひどい怪我じゃなにって言つてたし……」

愛奈の傍に立つ加奈江は、恐る恐るといった感じで愛奈に話しかける。

「うそ……」

そんな加奈江の言葉に返事をするものの、愛奈の視線は春から逸れることはなく、動き出す気配も無かった。愛奈の様子を見て加奈江が小さく溜め息を吐いたその時、コンチコンチ、病室のドアを一回ノックする音が聞こえた。

「あ、はい……」

相変わらず反応が無い愛奈をよそに、加奈江が病室のドアを開ける。

「すまない……雪村春の病室はここか?」

ドアを開けた先に立っていたのは、紺色のスーツに身を包んだ

背の高い青年だった。青年は走つて来たのか、息を切らしていた。

「え、ええ……そうですが……貴方は……」

「ああ……春の兄の……ゆきむら ひでこ雪村信だ。それで、弟は……」

「あつ……」

加奈江が信と言葉を交わしているとき、愛奈が驚いたような声をあげた。

「あつよつ、どうしたの?」

信を置いて愛奈の傍に来た加奈江は、愛奈が見つめる先に視線を向ける。そこにあつたのは……

「うつ……うつ……」

うつすらと左目を開けた春の顔だった。そして……

「…………眩しつ……」

それだけ言ってから、頭を布団の中に引っ込めてしまった。

「…………元気みたいだな……」

二つの間にかベッドの近くに立っていた信は、弟の姿を見て思わず苦笑を漏らす。

「…………おこい?あれ、俺は……」

ふと聞こえてきた声が兄のものであることに気が付いた春は、布団からひょっこりと顔を出したが、その瞬間固まってしまう。

「雪村くん……クスツ……」

「……おにい？” “おにい” つて…… プツ……」

信の傍で、笑いをこらえる愛奈と加奈江の姿を捉え、一人の様子をポカンとした様子で見ていたが……

「つーーーな、なんでつーーー痛うーーー」

薄く開いていた目をクツキリ開いた春は掛け布団」と上半身をガバッと起こすと、頭部に感じた刺すような痛みに思わず顔をしかめた。

（何があつたんやつけ……確かに俺は、陣内とかいうヤツにしばかれて……その後は……）

しかめつ面になつた春は、記憶を辿りうとするが、しばらく陣内に殴られた後からの記憶がなかなか出てこなかつた。そのとき、ある映像が脳裏をよぎる。

倒れしていく自分。

そんな自分を受け止めた少女。

映像越しにも伝わる、少女の温もりと、艶のある黒髪から漂つ
香り……

「――――」

「…………」

「雪村くん？」

「…………ん？」

自分にかけられた声に気付いた春が声の聞こえた視線を向けると、間近にまで顔を近づけていた愛奈が、不安気な表情で見つめていた。

「あ…………」

そんな愛奈の顔を見た瞬間、春の顔が急激に赤みを帯びていく。

（な、なんやこれ……熱つ……）

唐突に全身を駆け巡る異質な熱……未知の感覚に戸惑つ春は、思わず顔を伏せる。

「おでー!…………痛むの?」

そんな春の気持ちなどまるで知らない愛奈は、その細くしなやかな指で春の額に触れた。

「な、なんでもないわつ…………」

愛奈の指が額に触れた瞬間、春は愛奈の顔を見ずにやや語氣を

荒げてやつ言つてから、掛け布団の中に全身を包むよつとして入つてしまつた。

「あ、ちゅうとー……本当に大丈夫? 具合が悪いなら……」

愛奈の声は、春にはまるで聞こえていなかつた。

（ほんま、なんなんやこれ……熱いし、なんかドクドク濡らしるし……わけわからんわ、クソオ……）

「じ、じいじい……せんせい医者読んだほうがいいかな、加奈江ちゃん……」

…

春の様子がおかしいことに狼狽えながら、隣にいた加奈江を愛奈は困り顔で見る。

「大丈夫よ。じーせほつといたつて治るから」

春の様子がおかしくなつた原因をなんとなく察したのか、加奈江は呆れたような口調で返した。

「それに、お医者さまにほじりもならないだらうしな……」

自分の弟の様子を楽し気に一いやいやと見ていた信が、加奈江に続ぐよつて言ひ。

「え?……ええ?」

加奈江と信の言葉に、困惑しながら意味がわからないといった感じに首を傾げる愛奈。

そんな彼女たちをよそに、春は暫しの間布団に籠り、自分の中に芽生えた気持ちに一人悩み続けるのであつた。

「……食いしばれ」

（やつと退院……思つたより、時間かかつてしまつたな……）

そんなことを考えながら春は病院を出て、迎えに来ると言つて
いた兄の元へと向かつた。

春が陣内によつて額に負つた怪我は、決してひどい怪我とはい
えないものの、一度は意識を失つたうえに、出血量が多くつたため、
検査などの為に入院することになつたのだった。

（北見……）

春の脳裏に、一人の少女の顔が浮かんぶ。

北見愛奈……芍薬のようなたおやかとした立ち姿に抜群のスタ
イル、腰の辺りまである流麗な長い黒髪、目鼻立ちの整つた端正な
顔立ちは十五歳という年齢には不相応な優雅さを纏つ少女。

そんな彼女は、春が入院してから毎日病室に来ては、授業内容
を丁寧にまとめたノートを見せたり、学校であつた出来事を話して
くれていた。

春は自分から話しかけることはなく、愛奈の言葉に相槌を打つ
か、一言だけ返事をするだけであり、表情も愛想が無かつたが、内
心では愛奈が自分のところへ何度も来てくれることが嬉しかつた。

「よつ、久しふりだな」

「おここ……悪いな、わざわざ迎えに来てもうて……」

黒塗りの普通車に背中を預けて立つ信は、春に向かって右手をビックと上げる。春は伏し顔がちになりながら、迎えに来てくれた信に謝辞の言葉を口こした。

「流石に今日退院する弟を歩いて帰らせるわけにはいかないだろ? ここからだと、家はあまり近くないしな……ま、とりあえず乗れ」

「……おう

雪のように白い歯を見せて微笑みながらうつと、信は車に乗り込む。春もそれに続くように助手席に乗った。

「せつてど……今日まだラムでもやつてくれかな……」

春が退院したその日の夕方、四谷^{よのや}岳は学校帰りにゲームセンターに来ていた。

南高の制服キチッと身に付けた中肉中背の体と、短く切られた爽やかな印象の黒髪に、黒縁眼鏡をかけた特筆するところも無い顔立ちは、どこにでもいる平凡な少年に見える。

「あんまり並んでねえといいんだがな……

そう呟くと、岳は両替機に向かいながらスラックスのポケットから財布を取り出した。その時……

「おつてメハ……ひょっと聞きてえことあんだナビ……」

背後から声を掛けられ、岳はゆっくり振り向く。そこにいたのは、黒い学ランを着た、見るからにヤンキーといった雰囲気の少年

たちだつた。

(中央の一年か。今は相手にしたくねえんだが……それを許してくれるわけねえよな)

「まずは、外に出てくれるか?」

「……ああ、いいぜ」

四谷が連れてこられたのは、ゲームセンターの裏口近く……一台ほど車が停まっているが、人影は見当たらない。

「それで、聞きてえ」とつてのはなんだよ?」

「俺らの仲間がおつかねえ田に遭わされたんだよ……雪村とかいう南高の一年にな……」

岳を囲むようにして、中央高校の不良たちは「ヤーヤー」と笑つている。彼らの態度に、岳は小さく肩を竦める。その表情には、今の状況に危機感を抱いている感じは見受けられない。

「その腹癒せに、”テメエをボコつていいですか?”って聞いひつと思つたんだが……」

リーダー格と思しき少年の顔から笑みが消える。それに呼応するかのように周りの不良たちの顔も険しくなる。それでも、岳は余裕のある態度を崩さない。

「やつぱボコらせてもうつぜ……テメエ、なんか気に入らねえから

そう言つた瞬間、リーダー格の少年は右手を上げた。それを合図で、不良たちが一斉に岳に襲いかかった。

「まつたく……回りくどい一年坊だな……」

岳はカバンから手を放す。手から離れたカバンがドサツと地面に落ちたその時……

「お！」おつー？』

岳から見て左方から向かつてきた不良の鳩尾に、春はボディーブローを叩き込んでいた。鳩尾への強烈な一撃に、不良は地面に転がり、腹を抑えながら足をジタバタと動かした。

「いじえ、 いてえええええ！……」

そんな彼の姿を見て、岳に向かつていた不良たちの足が止まる。その表情には、一様に驚愕の色が浮かんでいた。

「いじえ、 いてえええええ！……やりたかっただろ？やりたくてしようがないんだろ？そんなツラしてねえでどんどん向かつて来い」

楽しくて堪らないといった表情で、岳は不良たちを挑発するように入差し指をチョイトイと動かした。

「び、ビビんなつ！行くぞつ！……」

リーダー格の少年は一喝しながら、岳に正面から殴りかかる。

「やつやつ、やつ」なくつちや あな……」「

「オラア……」

リーダー格の少年の握り締めた右手が岳の頬へと向かつ。

「……食いしばれよ」

屈むようにして躰した岳は、小さくしゃつぱつと、グッと右の拳に力を込める。

「せいっ……」

掛け声とともに放たれた拳はリーダー格の少年の顎を正確に捉え、岳は一切の躊躇無く振り抜いた。

「つあ……」

強い踏み込みから放たれたアッパー・カット……

その一撃を受けたリーダー格の少年は、膝から崩れ落ちた。

「ああっ……たいちゃんが……」

「や、やべえよ……たいちゃんが敵わねえなんて……」

たいちゃんと呼ばれた少年は、倒れこんだまま動かなかつた。一度は戦意を取り戻した不良たちの表情が青ざめていく。

「だ、だけど……逃げたりしたら生田さんからなこされるかわからんないし……」

「なにゴチャゴチャ言つてんだ……」ひきはまがひきはんだ
止まつてんじやねえ……」

苛立ちながら咲は不良たちに近づく。不良たちは互に皿で合図を送り、行動を起こした。

「たいちやんをそのままににしておかなによな……逃げるやつ……」

不良たちは素早くたいちやんと呼ばれた少年と、鳩尾を押えて苦しんでくる少年を一人一組で抱えて逃げ出した。

「チツ……ダサいやつらだな」

不良たちが逃げた方向を向いて咲は手打ちをすると、カバンを拾つた。

「今度はもつと、大勢連れて来いよ。逃げんのも無しだからな……わい、ドリマドリマつと……」

咲は苦笑混じりに呟くと、不完全燃焼な今の心をゲームで燃やしきりやつと考えながら、歩き出した。

「わかつたな？」

「はああ……燃えたよ……燃え尽きた……」

岳はドラムキットを再現した筐体の前で、ステッキを持った両手をブラリと下げ、天井を見上げてボソッと呟く。予めブレザーを脱いでいたとはいえ、全身汗だくなっていた。その時、ポケットに入っていた携帯電話が震えた。

「おー……誰だ？」

筐体の前の椅子から立ち上がり、ブレザーを羽織ると携帯を取り出して通話ボタンを押す。

『よひ、タケ……冬樹だ』

「ウッス……びひした?」

電話の向こうから聞いたのは、岳の一年先輩である桜庭冬樹の声だった。相手が先輩であるにも関わらず、岳の口調には敬いといつものを感じられない。

『今から、俺のアパートに来れるか?話があるんだが……』

「ん?……ああ、別にいいけど」

冬樹の唐突な呼び出しに疑問を抱きながらも、岳はあまり気にせずにそれに応じた。

『悪いな……じゃ、後でな』

それだけ言つと、冬樹は電話を切つた。耳に当たる携帯電話から聞こえるのは、どこか虚しい響きの電子音だけとなる。

「話……ね。つまんねえことじやねえだらうな……」

そう呟きながら携帯をポケットにしまつと、カバンを持ってゲームセンターの入り口へ歩き出した。

「さあ、と……大丈夫か、飛鳥？」

夕刻の公園……赤色の携帯電話をポケットにしまつた冬樹は、自分のすぐ目の前の公衆トイレに背中を預けて座り込んでいる、明るめの茶髪を全体的に逆立つた感じのソフトモヒカンにした少年……毛利飛鳥に手を差し伸べた。

「あ、スンマセン……冬樹さん……」

飛鳥は、いくつか傷や痣の着いた顔に申し訳なさそうな表情を浮かべながら、冬樹の手を取る。

「気にすんな……よつと……」

飛鳥が自分の手を取るのを見ると、冬樹はその手を握つてグイッと引っ張つて立たせた。

「くつ……何者なんだあ、テメエはあ……くつう……」

冬樹たちの背後から、悔しさが込められた声が聞こえる。冬樹がチラリと視線を向けた先には、鼻血を垂らし、目に涙を浮かべた少年……

春を病院送りにした張本人、陣内とその取り巻きの双子の少年が地に片膝を着いていた。

「桜庭冬樹ってんだが……マジで知らねえのか？」

呆れたような口調でそう言つた冬樹の言葉に、陣内たちは首を横に振る。

「そりゃ……まつ、それはそりゃ……」

冬樹は小さく溜め息を吐いてから陣内たちに近づく。鼻先まで迫つて自分たちを見降ろす冬樹の迫力に、陣内は思わず息を飲んだ。

「……」

「……」

「……」

あからさまにウンザリといった感じを出しながら、冬樹はしゃがみ込み陣内たちに視線の高さを合わせる。

「……」を通りかかるまで、二回もお前のお仲間を粗手にすることになつたんだがよ……」

しゃがみ込んで、陣内に顔を間近に近づけて睨みつける冬樹は、淡々と続ける。冬樹の睨みに怯える陣内は、思わず顔を逸らす。

「そいつらみんな……雪村ってヤツに自分たちの仲間がなんたらかんたらって言うんだよ……」

「つーーー。」

冬樹の口から出た”雪村”といつ単語にて、陣内たちがビクリと体を震わせる。

「……あこづらの”お仲間”つてのが、雪村とやらひじんな日に遭わされたか知らねえが……」

そこまで言った瞬間、冬樹は陣内の前髪をガツと掴み、自分の方を向かせた。

「ぐつ……」

「……南高の生徒とくじやあ片つ端から噛み付くのはじりかと思つぞ?仕返しのつもりなら、雪村つてヤツだけを狙えばいいだろ?が……」

それだけ言つと、陣内の髪から手を放して立ち上がる。

「……お前らのアタマと仲間に伝える。明田……いや、明後日の夕方、雪村つてヤツを中央まで連れてくから、黙つて待つてろつてな……」

「つ……」

「わかつたな?」

舌打ちをした陣内を、冬樹はキツと睨みつける。その視線は、頷くことしか許さないと雄弁に物語ついていた。

「……行くぞ」

陣内はそう言つて立ち上ると、走つてその場から立ち去る。

「あ、ちょっと…」

「待つてよ、よしひやん！」

双子の少年も立ち上ると、陣内を追つて走り去つて行つた。

「雪村か……飛鳥、お前知つてるか？」

「一年で一番背の高い男子……特別高いから、入学式で立つてじゃないツスか……」

飛鳥がそう答えると、冬樹は困つたといった感じでボサボサの髪を搔いた。

「……寝坊したんだよ」

「……そッスか」

冬樹の一言に、飛鳥は思わず溜め息を吐いた。

「おまつと座上までついて来おおおこつ……」

（…………？）

退院翌日の朝、教室の扉を開けた春は、思わず立ち止まる。ホームルーム開始十五分前の教室の中から聞こえていた生徒たちの話し声が、春が現れた途端に止み、クラスメイトたちの視線が自分に向けられたことに、春は戸惑っていた。

（なんやいつたい……）

クラスメイトたちの向ける視線には、久しぶりに学校に来た春を歓迎してくれているという感じは見受けられない。特に、男子からの視線は刺々しさすら感じられるものだった。

「…………」

春はその視線を無視するように伏し目がちになりながら窓際の一番後ろにある自分の席に腰を降ろし、カバンから取り出した勉強道具を机の引き出しに入れしていく。

そんな春を時折チラチラ見ながら、クラスメイトたちは声を潜めて話し出す。春は居心地の悪さを感じながら、頬杖を着いてボンヤリと窓から外を眺める。それから少しだけ時間が経ち……

「あ、あれ？みんな、どうしたの？」

愛奈が教室の扉を開けた。教室の雰囲気に困惑しながら、愛奈はクラスメイトたちを見回す。

「オツス、北見」

「おおむね、一ヶ月で」

「うん、おめでたー。おめでたー。」

クラスメイトからの挨拶に左手を小さく振りながら柔らかな笑みを浮かべた愛奈は、外を見つめる春の姿を見つけると早歩きで近くへ。

「おはよう、雪村くん！」

『ウニ』

以前と違い、愛奈は春の肩をポンッと叩いて挨拶をしてくる。思わず不意打ちに春は一瞬体を震わせるが、何事も無かつたかのように小さく返事をした。

「あ、それと……退院、おめでとうっ！」

גָּתָן

まるで太陽のように眩しい笑顔で祝いの言葉を発した愛奈をまともに見れず、春は伏し目がちになつてますます声を小さくして返事をした。

「おっと、もう終わりか……じゃ、明日の授業の始めに小テストするからな……点数が四割切つたら、課題を増やすんでそのつもりで」

四時限目の終了を告げるチャイムが鳴り響いてから、五十代ほどの数学教師の告げた言葉に生徒たちは溜め息を漏らす。

「あと雪村……怪我で入院してたからって、お前も例外じゃないからな……」

そう言い残して、数学教師は教室をあとにした。

（小テストか……ま、四割ならなんとかいけそうやな……）

そんなことを考えながら、春はカバンの中から紺一色の弁当袋を取り出したその時……

「ねえ、ゆきむ……」

「雪村はこるかああー!?」

春に話しかけようとした愛奈の声を遮るように、教室に大声が響き渡る。

「お、オカベつち……声でかいって……」

教室の入り口にいたのは、金髪のショートヘアに、両方の耳に三つずつピアスを付けた見るからにヤンキーといった風貌の少年、岡部翼と、頬に絆創膏を貼つた、明るめの茶髪をソフトモヒカンにした少年、毛利飛鳥だった。

「うるせえぞ飛鳥ああーーー！」

「オカベつちが一番うるさいって……」

「……はあ……」

やたらと大声で吠える翼と、それをたしなめようとする飛鳥に、春は大きく溜め息を吐きながら近づいた。

「なんか、間近で見るとだけええぞおおお……」

「ちよつ、そんな」と大声で言つちや駄目だつて……」

「…………」

間近にまで近づいて一人を一人を無言で見下ろす春は、翼の大聲に顔を顰める。

「ちよつと屋上まで来おおお……」

「だ、大事な話があるから……来て欲しいんだけど……」

「……ええけど……」

なんとなく嫌な予感を感じながらも、春は一人の誘いに応じる。

「しゃあっーーついて来おーー！」

そういふと翼は、春と飛鳥を置いて走り出した。

「……ゴメンな。普段は、あそこまでつるさんないんだけど……や、それじゃあ、ついて来てくれ……」

「…………おひ…………」

申し訳なわやうにそりそりと、飛鳥は翼が走つて行つた方に歩を出しつゝもそれにつれて行つた。

「あつ…………行つちやつた…………」

成り行きをオロオロしながら見ていた愛奈は、春が教室を出で行くのを見ると溜め息を吐きながら小さく肩を落とした。

「やつぱつ、私だと加奈江ちゃんみたいにつまくいかなこよね…………」

「何がつまくいかなこつて?」

「ふえーーーあ、加奈江ちゃん…………」

呟きを漏らした愛奈は、こいつの間にか近づいていた加奈江が声をかける。声をかけられるまで気づかなかつた愛奈は、思わず変な悲鳴をあげる。

「”ふえ”つて…………なにそれ…………ちよつと、可愛いんだナビ…………」

「ちよつとやだ…………え?」

加奈江の言葉に、愛奈はみるみるうちに顔を赤くしていく。その時、ふと周囲から視線を感じて見回してみると……

「…………いい」

「…………やつぱ、いい」

学食に行かず教室に残っていたクラスの男子が、妙に恍惚とした笑顔を浮かべて愛奈を見つめていた。

「うう……バカアツ！」

「クスッ……はいはい」

小走りで教室を出て行く愛奈を、加奈江は笑顔をで追いかけて行つた。

「……お前の所為じやねえよ

「話つて……なんですか？」

飛鳥に連れられてやつて来た屋上……春は、緊張した面持ちで目の前に立つ一人の少年を見る。

「俺は三年の桜庭だ。ここつは……」

「……一年の四谷だ」

「はあ……」

冬樹と田の簡単な自己紹介に、春は僅かに頭を下げる。春を呼び出した翼と飛鳥は、既に屋上を出ていた。

「お前、少し前に中央の一年とやり合つたら？」

「……。」

冬樹の口から出たのは、自分が聞いた話の真偽を確認する質問、それを聞いた春は眉をピクリと動かす。一文字に悶ぜられた唇の奥からは、歯を軋ませる音がした。

「それで、問題なのはな……」

冬樹はそこまで言つてから、少し深く息を吸つ。その仕草に、春は思わず息を飲む。

「入院してたらしいから、知らねえかもな……お前に、自分たちの仲間が痛い目に遭わされたとか言つて、ウチの学校のヤツらに片つ端から喧嘩吹つ掛けんのだよ……」

「…………あつ…………」

冬樹から告げられた言葉を聞いたとき、春は何かを思い出したかのように、ハッした表情になるが、すぐに口を開ざして黙り込む。「だから、そのことで中央の連中と話をしに行くんだが……お前にも来てもらひうぞ……」

「…………」

冬樹と岳は、黙り込む春をじっと見つめる。春は一人の言葉を聞きながら俯いて、過去にあつた出来事を思い出していた。

（あの時と同じや……俺がキレてしまひ、そんで周りが巻き込まれて……）

「先輩たちについて行つたら……俺は、何をしたらええんですか？」

春は顔を上げると、意を決したように冬樹の目を真つ直ぐに見つめる。

「……話は俺とタケでつける。ただ、中央の一年とやり合つた本人がその場にいなつてのは良くねえから、ついて来つて言つたんだついて来つれたら、黙つて突つ立つてるだけでいい」

「…………それで、ええんですか？」

冬樹の言葉に、春は拍子抜けした様子で聞き返す。自分の喧嘩のことで話をしに行くのに、喧嘩をした張本人に何もしなくてもいいと言つた/樹の考えがわからず、春は首を傾げた。

「いいんだよ。話は終わりだ……明日の放課後、飛鳥に迎えに行かせるから教室で待つとけよ」

冬樹はもう話すこと無ことに、岳と春を置いてスタスマと歩き、屋上を後にする。

「つたぐ、真面目な話に俺を付き合わせんなんての……それはもう」と……

冬樹がいなくなつた屋上で、自己紹介をした後は沈黙していた岳は地面を軽く蹴つて愚痴をこぼすと、春にゆっくりと近づく。春の正面間近に来ると、岳は春の顔をじーっと見つめる。

「……なんですか？」

「ちょっと聞きてえんだけど……お前、なんで中央のヤシらとやつ合つハメになつたんだ？」

「え……」

「どつも……お前見ると、自分から喧嘩売つたとは思えねえし……ちよつと氣になつたんだよ……聞かせてくれるか？」

「……はー」

眼光を鋭くして聞いてくる岳の迫力に負け、春は利保川の河川敷で起きた出来事を、ゆっくりと話し始めた。

「…… そんで、気付いた時には病院にして……」

「なるほど……」

二人はフレンスに背を預けて隣り合わせで立っていた。

春の話を聞き終えた岳は、神妙な表情を浮かべて、黒縁眼鏡を人差し指でクイックと上げた。

「面倒くせえなお前…… 手を出すのは嫌だが逃げるのも嫌…… それでボコられた拳句、病院送り…… ホントにバカだな」

「うう……」

呆れ果てたとでも言つよつて、岳は肩を竦めると、春の肩を軽く叩いた。

「でも…… 僕、中学ん頃に同じことやらかして…… そん時も、僕と同じ中学にあるからって、クラスの人や先輩たちが傷付くことなんつて…… もう、嫌やつたんです…… あんなのは……」

春は河川敷での出来事を話す中で、気付けば自分の思いを聞いてほしいとまで思い始めたのか、普段と比べてかなり饒舌になるもの、たどたどしい感じは抜けなかつた。

「…… 中学のときも、相手から喧嘩売られてはやられっぱなしで通

「やつとしで、結局ブチ切れたのか？」

岳が聞くと、春は口クリと無言で頷いた。

（……周りの連中が痛い目見るのを自分のせこだと思つてゐるとはな
……つたく……）

「……お前の所為じやねえよ」

「……こや、俺の所為です……」

（……ホント、面倒くせえ……）

苛立たしげに出た岳の言葉に、春は自分の耳を疑い言い返す。
岳の口から出たその言葉を、春は認めようとしなかった。

「だから違つての……相手に問題があるつて……」

「それはやつかもしませんけど……俺がやり返したりしなけりや、
みんな巻き込まれんで済んだかもしませんし……」

「こや、だからな……」

「……そもそも……」

二人はいつの間にか、押し問答に突入していた。その行為は、
苛立つていた岳を更に苛立たせ、春もまた、額に青筋を浮かべるほ
どの苛立ちを抱え始める。

「だから違つて言つてんだろ……お前の所為じやねえ……」

「俺の所為やつて言うどるやないですか！！」

いつの間にか、春と岳は言い合になっていた。春に非は無いと言い張る岳と、自分の責任だという考え方を決して変えない春……そんな言い合はいつしか……

「頑固な野郎だなあ！..”俺は悪くねえ”って言えばいいんだよつ！..オラッ、言えよつ！..」

「くつ……じゃああんたは、自分の喧嘩に巻き込まれる形で怪我した人にそう言えるんかあつ！？」

言い争いを通り越して殴り合いとなつて行った。普段はおとなしいを通り越して無口な春が口調を荒げ、敬語も使わなくなり、人を殴ることを頑なに嫌がっていた人物とは思えない。屋上の地面には、岳の眼鏡が落ちている。

「ちつ……言つてみりやあ案外わかってくれつかもしれねえだろつ！..」

左の頬を殴られた岳が、叫びながら春の頬目掛けて右の拳を叩き込む。

「ぐあつ！..」

頬に直撃をもつた春は、屋上の地面に倒れ込むが、すぐに身体を起こして岳を睨みつける。

「うう……そんなん無理に決まつとるやうがつ……」

そう言つた次の瞬間、岳の腹に衝撃が伝わる。腹には、春の放つた膝蹴りがしつかりと入つていた。

「おお……くつ、言つてもねえくせして、無理とか言つなあ……」

地面に崩れ落ちそうになるのを堪えた岳は、お返しと言わんばかりに春の腹部目掛けて前蹴りを放つ。

「あつ……が、はあ……んこと何も知らんくせして……勝手なことヌカすなアホんだらあ……！」

雄叫びをあげた春は岳の胸ぐらを掴むと、岳の顔面に一切の躊躇も見せずに自分の額をぶつけた。

「先輩に向かつてアホつて言つなあ……」のクソバカがあ……」

鼻血を垂れ流す岳は、視界のボヤける目でなんとか狙いを定めると、その場から春に向かつてジャンプし、体重を乗せた右ストレートを春の顔面に叩き込む。

「う……くあ……」

「ぐう……せえ……」

強烈な一撃を受けて、屋上の地面に背中から倒れる春。

一方で、ジャンプしながらパンチを放つた岳も、着地と同時に地面に膝を着き倒れ込みそうになる。

「どうしたあ……もう終わりかあ……」

「……クソがあ……」

ヨロヨロと立ち上がる岳は、表情だけは余裕綽々と言いつつ、既にフラフラの身で春を挑発する。

春はそれに応えるかのように、なんとか身体に力を入れて立ち上がる。

もはや本題からは離れてしまっているが、二人はそれを気にすることもなく、互いに声を張り上げながら殴り合いに没頭していくのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1977z/>

真那浦南の不発弾(ダッド・ボーイ)

2012年1月5日23時47分発行